

カナダにおける臨床教育学の動向  
—発達援助の原理とシステムを中心に—

影 浦 紀 子

**Movement of clinical studies of education in Canada**  
**— focusing on the principle and system for helping child's development —**

**Noriko Kageura**

**Abstract**

Recently, the movement of clinical studies of education becomes one flow in the pedagogy of Japan. Clinical education aims at getting rid of from a traditional, standard pedagogy. It aims to research problems of children who are holding uneasiness in mind and body, and parents /teacher who has faced difficulty bringing up a child and education. But it cannot be said that common understanding will be obtained in the area of investigation and the method because it cannot be said that the term of clinical education also will still receive citizenship. There is still clinical education during the beginning.

Therefore, we investigated an international moving of clinical studies of education in Canada, Toronto, 2004, 11, 22—12, 2. In this paper, from the investigation, I intend to clarify the principle and system for helping child's development.

Key words : Clinical studies of education, helping child's development, Child understanding, Caring, Record

**はじめに**

近年、日本の教育学の中で臨床教育学の動きが一つになりつつある。臨床教育学は、これまでの伝統的な規範的教育学を脱却し、さまざまな不安を抱える子どもやそういった子どもたちを支える援助者（親、教師、保育者）の問題を具体的に研究しようとしている。しかしまだ、臨床教育学の研究手法や領域において共通理解が得られているとはいえない草創期の段階である<sup>1</sup>。そこで私たちのグループでは、2004年11月22日から12月2日まで、

---

<sup>1</sup> 臨床教育学の動向については、小林剛、皇紀夫、田中孝彦編『臨床教育学序説』柏書房、2002年を参照。

カナダ・トロントにおいて、この臨床教育学の国際的な動向を調査を行った。本稿は、この10日間にわたる調査から、とりわけ保育士養成の視点から、カナダ、トロントにおける発達援助のための原理とシステムに焦点をあてて整理し報告したい。

まず、カナダ調査全体の主な流れは以下の通りである。<sup>2</sup>

11月22日（月）成田国際空港発。トロント国際空港着。通訳・桜井みどりさんと打ち合わせ。

11月23日（火）午前、Debra Pepler教授と調査日程の打ち合わせ。午後、トロントの教育委員会（Trent District School Board）で、Karen Fobes氏から特別教育の仕組みとサポートについて資料を受け、説明、懇談。午後、研究ミーティング。

11月24日（水）午前、打ち合わせ会議。午後、ヨーク大学・ラマルシェセンター（LaMarsh Center for Research on Violence & Conflict Resolution）でランチミーティング。田中孝彦氏から調査の目的を説明。ラマルシェのスタッフ、組織、仕組みについて、今、進行しているさまざまなプロジェクトの報告を受け、懇談。

11月25日（木）午前、子どもの発達研究所（Child Development Institute）を視察。プログラムコーディネーターのNicola Slater氏に、施設・レジデンスの案内、この施設で行われているプログラム（特に男の子の）について説明。施設長Leena K. Augimeri氏と懇談。午後、コーディネーターのRodelyn Wisco氏から女の子向けのプログラムについて説明、懇談。夕方、ヨーク大学に移動し、心理学シンポジウムに参加する（トロント大学、ルイス教授（Marc Lewis）による「幼い子どもの情動制御にかかわる脳のメカニズム」）17：00からペプラー教授のヨーク大学大学院における講義。いじめに対する介入（Interventions for Bullying Problems : Scaffolding）

11月26日（金）午前、トロント大学附属学校（ICS : Institute of Child Study）を視察。Elizabeth Morley校長からISCの成り立ち、フィロソフィーについて説明。担当教員（Kathy先生）の案内で校内施設、教室を回り、各学年の子どもたちの授業の様子を見る。その後、Morley先生とミーティング。午後、トロント大学・OISEのJanette Pelletier教授（心理学）とJohn Morgan教授（特別教育）からOISEの教員養成のプログラムについて説明。ペプラー教授を交えて懇談。

---

<sup>2</sup> 調査の詳細については、影浦紀子「第3部臨床教育学の国際的動向—カナダ・トロント調査の概要」田中孝彦 代表『臨床教育学と教師教育・研究資料集Ⅱ』科研費共同研究（基盤研究B・1530160）2005年、183～189頁、参照。

11月29日（月）午前、ヨーク大学・ペプラー教授の研究室で、質問、ミーティング。ヨーク大学教育学部Kathy Le Blanc氏とIsabel Killoran教授よりヨーク大学の教員養成システムについて説明、懇談。午後、ラマルシュでランチプレゼンテーション、田中孝彦氏、庄井良信氏より調査の概要について説明、懇談。15：00より、子ども病院（Hospital for Sick Children）Bruce Ferguson教授とPeter Chaban氏、ロンダ氏より、施設の役割とプログラムの説明を受け、懇談。

11月30日（火）午前、トロント国際空港発。バンクーバー空港を経由して、日本へ。

12月1日（水）成田国際空港着。

## I. 発達援助者の専門性とは何か—オンタリオ州の特殊教育プログラム

私たちは、まず調査の最初のカナダの教育がどのように実施されているのか、大まかな概要と行政的なシステムについて調査するために、Toronto District School Board（トロント教育委員会）を訪ねた。臨床教育学（clinical education）というまだ耳慣れない概念をもつこの研究グループに対して特殊教育に焦点をあてたお話をしていただいた。ヨーク大学のペプラー教授も同行してくださり、ペプラー教授、田中、折出、庄井、影浦で訪問し、教育長のカレン氏（Karen Fobes）が応対してくださった。カレンさんは、Special Needs Educationのスペシャリストでもあり、このSchool Boardのトップでもある。昼食をとりながら、懇談。教育委員会のトレードマークである「りんご」のブローチ（知識の象徴）をプレゼントしていただく。

懇談は、はじめに、田中氏より調査の目的、日本の子どもが抱えている問題、社会的背景について簡単な説明があり、その後、カレンさんから、まず大まかに特殊教育プログラムのシステムについて説明、私たちから質問するという形で行われた。

オンタリオ州の特殊教育プログラムは、1980年にスタートした。プログラムの背景には、移民で英語を第一言語としない子ども、戦争のために教育を受けていない子ども、障害をもった子どもなど、学びのスタイルが異なる子どもたちが増えたことがあった。特徴的と思われたのは、以下の3点である。

一つ目は、IEP（Individual Education Plan）という個別の教育計画である。これは、子どもの発達をアセスメントし、必要なプログラムを査定するというもので、毎年更新されている。プログラムの中には、発達の遅れや障害の場合だけでなく、「gifted」と呼ばれ

る能力が高い子どもへの対応プログラムや、「セクション20」と呼ばれる犯罪や非社会的行動を犯した子どもへの対応プログラムも含まれている。査定は、心理学者や資格を持った特殊教育の教師が行う。具体的なプログラムとしては、Small class（特殊学級）で発達を保障することや、アンガーマネジメントや歌唱のプログラム、夜間プログラム、Homeworkプログラム、サマーキャンプなどもある。

二つ目は、教科書中心の一斉授業からExperiment Education（体験教育）への転換である。Experiment Educationとは、さまざま学びのスタイル（目、耳を使った学びや、実際に体験しながら学ぶなど）を全部授業に組みこむように構成された授業を指し、子どもの表現の仕方も、試験と論述によるものからプレゼンテーションや絵、マルチメディアを用いたものへと転換をはかっていた。教室の中には、日本のように担任教師1人ではなく、何らかの助けを必要とする子どもに対応するEducational assistantやChild and youth workerなどの複数の教師が存在している。Educational assistantは、コミュニティーカレッジを出て、社会学、心理学などを学び学位を取得した教師で、子どものカリキュラムについてもアシストできる。一方、Child and youth workerは、Educational assistantと役割はほぼ同じだが、主に子どもの心理的な問題を援助し、カリキュラムの問題は扱わない。

三つ目として、これらの子どもたちの発達をアセスメントし、プログラムを査定、適切な教育や教師を配置するという一連の流れを作り出すためのシステム化された組織だ。オンタリオ州の教育システムは、まず、27万人の子どもが通っている540校を、24の学区に分けてそれぞれ約24校ずつにする。さらにその学区を6校ずつに分けて4 regionとしている。そして各学区のトップには、superintendent（監督者）というスーパーバイズする存在を置いている。教師とSE（special education teacher：特殊教育の教師）とsuperintendentの協同を作り出すこともIEPの役割でもある。

トロントに27万人の子どもがいて、そのうち障害のある子どもは4万人（10%以上）、何らかの助けが必要な子どもは5万人。何らかの助けとは、コミュニケーションの問題（LD、自閉症など）である。そうした子どもたちのためには、Small program（特殊学級）、Communication classなどもあるが、基本はインクルージョンである。一般クラスで生活し、できないところをSmall classへ行くという形だ。したがって、助けを必要とする子どもには、教師以外に、Educational assistantやChild and youth workerなどの特別な先生が必要となり、そうした子どもに丁寧に対応したり、さまざまプログラムを用意しようとするとき、お金が非常にかかる。一人に400万かかることもある。その資金を政府からもらってきて、

条件整備するのが、教育委員会の仕事でだとカレンさんはおっしゃっていた。

カレンさんの説明の後、調査メンバーから、emotionalな発達のトラブルにはどのように対応しているのか、こうしたプログラムの思想的背景には、デューイがあるのか、日本ではADHDの子どもが増えてきているがカナダではどうか、などの質問があった。emotionalな発達のトラブルに対しては、教室の中では、Educational assistantやChild and youth workerが援助するが、それ以外にも1995年にアメリカの人格教育プログラムなども輸入されてはいる。またデューイについては、デューイを意識してというよりも、現実の問題に応えようとしていくうちに、結果として体験型の授業形態となり、Experiment Educationとなっていた。そしてADHDの問題はカナダでも起こっており、そうした子どもにも特殊教育として対応しているということだった。ADHDの問題も含めて、学級経営に困難をきたしている教師も多く、カナダでは、採用後5年間で約20%の先生が辞めてしまうという（正確な数値は定かではない）。どうやって子どもとかかわるのかわからない教師も増えており、そういう教師のためのワークショップや研修も開かれているということだった。

懇談はおよそ2時間にわたって行われた。懇談を終えて、メンバーで少し話をした。そのときの話題は、発達援助者、とりわけ教師の専門性とは何かということになった。率直な感想として、カナダでは教師の役割が分業化しつつあるのではなかと思われた。その傾向は、フィンランドでも同様に見られたことだった。カリキュラム、学習については学級の担任教師が、情動的な発達のトラブルについてはEducational assistantやChild and youth workerなどの特別な教師が対応するといったように、分業が行われている。さらに学校では対応しきれないような何らかの問題を子どもが抱えていたら、問題を査定し、適切なプログラムを用意する。まるで大病院の検査、入院のようなシステムだ。そうになると、子どもの発達を援助する専門家である教師の専門性は、フィンランドのサブジェクトティーチャーにあるように、アカデミックな内容をいかに上手く教育するかということになってくるだろう。それ以外の問題は、加配の教師や特殊教育の専門家に任せるというのだ。本来、日本の教師は、生活綴方の実践にもあらわれているように、もともと総合型の専門性だったと言えるだろう。つまり教師が子どもの生活を含めてまるごととらえ、そこから生きた学びが起こってくるという歴史があった。しかし、今、教師一人の力では到底受け止め切れない、さまざまな問題が起こってきており、専門家の力は借りなくて対処できないのが現実である。だからといって、子どもの抱えている問題を手に負えないからといって放棄するのではなく、どんなに問題が複雑になっても、問題解決のための適切な選択と判

断の主体は子どもの発達を援助する専門家である教師にあるべきではないだろうか。

## II. 子ども理解に基づく教育・教員養成—ICSとOISEの教育・教員養成システム

私たちはカナダでの教育が実際にどのように行なわれているのか見たいと思った。通訳の桜井みどりさんにお話を聞いたところ、ICS (Institute of Child Study : トロント大学附属子ども研究施設) は、私たちの調査にぴったりではないかと教えていただいた。ICSは、トロント大学のOISE (Ontario Institute for Studies in Education of the University of Toronto : トロント大学附属オンタリオ教育研究所) の一部として、(1)幼稚園・小学校としての教育機関 (Laboratory school) , そして、(2)教員養成 (M. A. Program) , さらに(3)研究機関 (Laidlaw Research Centre) の3つの役割を持っている。そこで、桜井さんをお願いして、ICSの訪問とOISEでの教員養成についてお話をうかがうことになった。

### 1. トロント大学附属学校 (ICS) —Slow Educationとの出会い

11月26日 (金) 10 : 30, ICSに到着すると、学校は、閑静な住宅地の中にあった。昔、民家だった家を改装して学校にしたため、決して広くはなく、運動場も狭い。しかしとてもあたたかい雰囲気があった。この学校は、3歳から小学6年生までの子どもたちが通っている。日本に置き換えるなら幼稚園と小学校が一貫で教育されている学校と言えるだろう。

学校に一步足を踏み入れると、子どもたちの声が聞こえるだけでなく、大学院生がしばしば出入りしていた。校内には、大学院生が使うresearch spaceもあった。玄関ホールには、パソコンがあり、子どもと院生がおしゃべりしていた。私たちは、まず、図書室で、校長のエリザベス氏 (Elizabeth Morley) と研究の目的や自己紹介を行い、ICSの概要についてお話をうかがった。

エリザベス氏によると、ICSのフィロソフィーは、“experience learning” と “security” であるという。“experience learning” とはデューイ (John Dewey, 1859-1952) の探求しながら学ぶという考え方であり、“security” , 安心、安定とは、文字通りの安心・安全と、間違っことを言ってもいい、次のステップにしようという、知的に安心してほしいという意味がある。探求者として知的にも安心しながら家族といるように過ごすことを目指している。

ICSには、現在3歳から6年生までの約200人の子どもが学んでいる。この学校に入るには、日本の大学附属の学校のような入学テストはない。親が入学させたいと思ったら入ることができる。したがって、ICSに通う子どもの中には障害をもった子どももいる。私たちが訪ねたときにはダウン症の子どもがいた。学費の半分は、親が払うことになる。しかしその教育の面白さ、そして教員スタッフの質の高さから、人気が非常に高く、現在100人以上の子どもが待機している状態だ。

ICSの教員は、北米全体に公募したくさんの希望者の中から選ばれる。選抜は、教師にも研究者にもなれる能力を備えているかどうかで決められる。研究には、カリキュラム、発達、認知、教員養成などがある。日本の授業研究 (Japanese lesson) にも注目しているとおっしゃっていた。

その後、学校施設内を院生に案内してもらった。特徴的な部分だけ報告する。

1年生のクラスは、民家だったということもあり、教室の形が円形だった。小さなキッチンがあり電子レンジもあった。クラスは1学年1クラスだが、一つのクラスは、2に分かれていて、一方が教科学習しているときは、一方が芸術というふうにならぬ人数で学ぶことができるようにしていた。子どもたちは思い思いの場所に座っている。私たちが訪れたとき、子どもたちはカーペットの上に座ってプリントを返却してもらっていた。

各クラスを見て回っていると、それぞれのクラスに学びのテーマがあった。子どもたちはテーマについて疑問に思ったことやわかったことをWeb上のKnowledge Forumにどんどん書き込んでいくという取り組みを行っていた。子どもたちの問いが書き込まれ、その子どもたちの問いからさらにテーマが膨らみ、カテゴリー化され、テーマはどんどん広がり深められていた。

4歳のクラスに行くと、ちょうど子どもたちはいなかったが、このクラスでは乗り物がテーマになっていて、教室の中には、クラスで見学に行った地下鉄の写真がたくさんあった。子どもから疑問を持ってもらうことを大切にしているという。このクラスにはダウン症の子どもがおり、その子どものための、視覚的な教材が数多く見られた。例えば、今日のスケジュールが絵カードになっているものなどだ。それは、障害をもった子どものためだけでなく、他の子どもたち全体のためでもあると話してくれた。

5歳のクラスでは、あちらこちらに座って絵と文章を書いていた。このクラスでは池がテーマになっていた。残り半分はフランス語へ行っている。フランス語は4歳から始まるという。最初はジェスチャーアプローチでゲームやお話を楽しみながら親しむという。

2年生のクラス。どのクラスも話し声が聞こえてくるが、ここはとても静かだ。子どもたちは黙って何か書いている。2年生は、動物がテーマになっており、教室にはカメレオンがいた。じっくりみること、観察することを大切にしていた。

5・6年生は、縦割りになっている。教室の中を覗くと、子どもたちはシルクハットをかぶったり、大きなめがねをかけたり、派手なスカートをはいたり、おのおの個性的な変装している。宿題をがんばったご褒美とのことだった。しかし表情は真剣でこのクラスのテーマである**Greatest Canadian**（偉大なカナダ人）について話し合っていた。このテーマはちょうどカナダの公共放送で一般の人たちが投票して偉大なカナダ人を決めようという番組にヒントを得て設定されていた。階段にはICSが選ぶ偉大なカナダ人の広告があった。ICSでも投票を行うらしい。

別の5・6年生の別のクラスでは、算数の時間でパソコンに向かっていた。この学校には一人に1台のパソコンがある。このクラスの算数はとても進んでいて、今中学2年生のレベルだということだ。

校内には、授業が行なわれている教室のほかに、パズルが用意された小さな部屋や、クッションやカーペットが敷いてあってリラックスできる雰囲気のある部屋もあった。

4年生のクラスでは、子どもたち、実習生、先生が円になって床に座り、Talking stickを使って話し合いが行われていた。1週間でもよかったこと、よくなかったことを子どもたちが話し、実習生が模造紙に書きとっていた。日本で言えば、朝の会や終わりの会でおこなう生活指導のようだが、ICSでは、**conflict resolution**の一環として重視しており、授業の時間をとって行っている。

別の4年生のクラスでは、耳をテーマにしていた。私たちが教室に入ると、押し寄せるように、日本から来たお客さんに自分たちが学んだことを見せたいと、我も我もと手をあげる。耳の気持ちを歌った歌や、耳の気持ちを表した劇、音を水につけるオンサの実験などなど。ある女の子が巧みにパソコンを使って、**Knowledge forum**について説明してくれた。

最後にアートの教室に行った。アートの教室は、校舎の隣の一軒家だった。まだできたばかりで新しいにおいがしていた。ここももとは学校の隣にあった民家である。他教科との連携も重視されており、国語との連携でシェイクスピアの劇の背景を描いたり、算数との連携で豆を素材とした幾何学模様の鍋敷きなどの作品があった。またリサイクル意識も高く、どんなに小さな紙の切れ端も集めてリサイクルされていた。

校内の見学後、校長先生のオフィスで懇談。日本からの調査メンバーの折出健二氏より、「ICSの教員はどうやって選ばれるのか。リサーチ能力とはどんな力か。」という質問が出された。それに対して、「もちろん論文を書くこともできなければならないが、それ以上に理論と実践をつなげようとする力も大切だ。“Good question is good researcher”それはその人のものの見方、考え方でわかる。そして疑問をもつ力だ。」という答えだった。また、田中孝彦氏から「ICSを見せてもらってとてもクリエイティブで探求的だが、困難を抱える子どもへの理解として何かされているのか。」という質問が出された。すると、ICSには、特権的な階級の子どももいるが、トラウマを抱えている子どももいて困難をもつ子どももいる。。具体的には、まず、グループで生活することによって、子ども一人ひとりが自分をわかってもらっていると実感できるようにすること、またそのグループの中で子どもが自分を出せるように努力している。ICSにはSpecial needs teacherが10%いる。Special needsのクラスもある。達成感 (success) と自己肯定感 (self-esteem) が大切であり、少しヘルプが必要な子どもにはより親密な密な関係がつかれるようにしている。

そして私たちが一番印象的だったのは、エリザベス先生の「学力より子ども理解が大切だ。それも深い理解が必要だ (deeply understanding) 。」という言葉だ。とくに初等教育においては、アカデミックな教育より、子どもの全体的発達の方が大切であり、学習者としての潜在能力 (potential) をどう広げていくかの方が大切だというのだ。なぜ、今、授業を止めるのか、それは、何にお金と時間を注ぐのかということだ、とおっしゃっていた。

さらに、子ども理解をどうやってトレーニングするのかという質問に対して、まずは、子どもを尊重することだという (respect for child)。つまり、子どもの発達を学ぶことであり、そのためには、長期の観察がベースになる。教員養成においても、最初は徹底的に観察 (observation) を行う。アカデミックな指導 (teach) は最初から行わない。少しずつ増やしていく。言い換えると、Teachable (何を教えることができるか) よりも、子どもが何を必要としているのかを理解する「子ども理解」を重視するということだ。そして子ども理解のトレーニングとして、次にあげられたのは、ミーティング (職員会議) である。職員会議では、今、気になる子は誰かということが話題になり、子どもをケアする力が大切になる。

また、「ICSで基になっている理論は何か」という質問に対して、security theory, 心理学, Child study movementということだった。さらに参考になっている文献として、認知心理学者、ハワード・ガードナーや、教育哲学者、ネル・ノディングスなどを紹介しても

らった。

最後に、ICSが特集された雑誌の記事「ザ・グローブ・アンド・メール」2003年9月27日号をみせていただいた。その記事の見出しは「Slow schooling!」。中で次のように説明している。

「スロー (slow)」とは、いろいろの情報を丸ごと飲み込むのではなく、じっくり味わうことであり、その情報のもつ固有の滋養が現れる前に吐き出すのではなく、しっかり消化することを指しています。つまり、「スロー」とは、ものごとを深く、徹底して解明することであり、学び方、質問の出し方、理解の仕方、その理解した事柄を他の領域に生かすことを学ぶことを言います。

ICSの子どもたちがKnowledge forumに取り組む姿や、クラス全体で話し合い発表しあう姿には、単に知識や技術を詰め込むのではなく、じっくりと自分と他者の中で消化し探求していくこの学校の思想が反映されているようだった。そして、校長先生のお話からは、こうした子どもたちを支える教員がじっくり子どもたちと子どもたちの問題に向き合っていた。ICSが教育の原点として重要視し、「スロー」という言葉で表している実践は、私たちが臨床教育学として、子どもの語りを聴き取ることや、記録すること、援助者同士のカンファレンスを行なうことを丁寧に実施し分析してきた蓄積と非常に重なる部分が多いと考えられる。

## 2. OISEの教員養成

午後、トロント大学附属の教育研究施設、OISE (Ontario Institute for Studies in Education of the University of Toronto) の教員養成のプログラムについて説明していただいた。説明してくださったのは、OISEのJanette Pelletier教授 (心理学) と、John Morgan教授 (特別支援教育) であった。

OISEは、もともと各州政府に所属し、地方の小学校に付設されていた教育研究施設だった。その後、大学院としてトロント大学の付設となった。トロント大学には教育学部はもともとなく、OISEで学ぶ学生は、別の大学を出て教員になりたい学生である。OISEには1年と2年がある。

今回、2年間のコースについてお話をうかがった。1年目は、Child study education (子ども研究) が必須になる。内容としては、幼稚園・小学校でのカリキュラムづくりを学ぶ。Practical (実践) とSeminar (理論) が半々でスイッチされる。専門は、幼稚園から小学校

の各教科，Special education (SE) があり，専門の他に，さらに二つ選ぶ。特に人気があるのは，SEである。2年目は，advance (応用) になり，論文コースか論文なしのコースのどちらかを選択する。論文なしの場合，数学，文学，programming (教育方法)，SEから二つ選択する。普通の教員養成校でSEの先生になろうと思ったら，余分に1年いるが，OISEは在学中にSEが取れる。最後の4ヶ月はインターンシップになる。

さらに，OISEの特殊教育について詳しく話を聞いた。カリキュラムは理論と実践の両方を含んでいるが，とくに，AssessmentとInstructionを身に付ける。LDあるいは，gifted，読み書きなどの単位をさらに取得すると，SEのspecialistになることができる。

オンタリオ州でのSEについて，スライドを使って簡単に説明があった。1980年まではSEは学区に任せていた。1980年にIEPスタートし，1998年に改定された。このときの改定のポイントは，保護者 (parent) の参加であった。つまり，IEPの査定に対して親が抗議する権利があるのだ。査定には，IEPの他に，In-school teamという学校内のインフォーマルな査定委員会もある。IEPは，委員会にかかわる人が多すぎて，長いものだと18ヶ月かかることもあるのだ。各学校には決まった数のSEがいる。SEの査定の80パーセントは学校内で行われている。

SEにおいて重要なのは，一つはAccommodationsである。つまり，通常クラスについていくためにどう保障するかということだ。例えば，計算機を与える，宿題を少なくする，テストの時間がほかの子どもより長くするなどである。二つ目は，Modificationsである。つまり，カリキュラムを変えるということだ。例えば，5年生の子が，5年生の教室にいるが，2年生の内容を与えるなどである。そして，三つ目は，Alternative school life skillを身に付けるということだ。

SETの仕事としては，特殊教育を実践することの他に，教師を助ける，IEP作成を助けるなどがある。EA (educational assistance) は教科のことだけでなく，SETからアドバイスをもらってSEの子どもにつく。

折出氏より，「日本ではADHDが増えており，SEの意味は変化してきている。カナダでもSEのspecialの意味が変わってきているのではないか。」という質問がなされた。それに対して，「1980年のときはハンディキャップとLDが主な対象だったが，今は，IPRCを通すだけですむ子どものほかに，病院の診断が下る子どももいる。」そして「ADHDは教育的配慮が必要なのであって，医学的な配慮が必要なのではない。」とおっしゃっていた。また，田中氏より，「5年以内にやめてしまう先生が約20%いると聞いたが，なぜだと思

うか。SEの子どもに手がおえないからなのか。」という質問が出された。それに対して「もしかしたら30%くらいいるかもしれない。1番の理由は政府からの援助が少なくなっているからだろう。もちろんSEの子どもの援助の仕方が分からなくてということもある。」さらに、1年目のchild studyについてたずねると、これは、長くされているカリキュラムだが、毎年変わっていく。ここではシステムティックに子どもを観察することを学ぶ。子どもの評価は、Evaluateテストではなく、Portfolioのレポートである。親も一緒にレポート作りを行う。◎○△×をどう使うかが難しいところだとおっしゃっていた。

### Ⅲ. 子どもの発達研究所 (Child Development Institute)

今回の調査では、学校以外の子どもの発達を支援しているさまざまな施設での調査も特徴だったと考えられる。私たちは、11月25日、Child Development Institute (こどもの発育研究所) を訪問した。ここは、12歳以下の法に触れる行為をしてしまった子どもとその家族のための施設である。ここは寄宿生であり、単なる子どもの矯正施設ではなく、子どもとその家族のケアを含めた援助を行なう施設である。入所については、もともとは警察からの紹介や協力で決定することが多かったが、今は学校からの紹介が多い。この施設の特徴的な点は、ソーシャルワーカーが強制的に連れてくる施設ではなく、親の意志で子どもとともに来る施設だということだ。だから、プログラムの方針は、スタッフだけで決めるのではなく、家族とともに話し合って決定される。実際に、どういうことを達成したいかという目標やプログラムの内容が書かれたシートは、親の言葉、子どもの言葉で書かれていた。

まず、最初に、施設長のレーナ氏 (Leena K. Augimeri) と挨拶を交わし、午前中、ニコラ氏 (Nicola Slater) に施設を案内してもらった。

施設には、職員のオフィス、親とのカンファレンスを行う部屋、子どものためのトレーニングルーム、レジデンス、学校、職員のミーティングルームなどがあった。

カンファレンスを行う部屋では、カメラとobservation millerが取り付けられており、カンファレンスの記録はすべて文字化し、問題の査定と同時に職員の力量も見られることになる。徹底した記録とその記録の共有が行われているようだった。ミーティングルームではスタッフたちがとても活発に議論していた。レジデンスには、親の意志のもとに、6ヵ月から9ヶ月入所できる。訪問時には8人の男の子が寄宿していた。学校には、教員と

child and youth workerがいる。私たちが訪れたとき、ちょうど休み時間で、算数に関係したカードゲームを楽しんでいた。先生の話によると「このクラスの目的は、子どもたちがもともと持っている能力を戻すこと、そして自信を育てることだ。」と話してくれた。廊下や階段などいたるところに子どもの絵やサマーキャンプの写真などがある。

その後、ニコラさんからビデオを使って男の子のプロジェクトを中心に説明してもらった。この施設の目的は、リスクアセスメントと予防であり、そのためのプログラムとして、「SNAP」がある。「SNAP」とは、“Stop now and plan”の略であり、施設のいたるところにマスコットキャラクターの「スナップくん」とともに掲示されている。

これは、日本的に言うならば、切れそうになったとき、指をぱちんと鳴らして立ち止まってちょっと考えようというものだ。つまり、葛藤状態に陥ったときに、そのストレスを衝動的に暴力に訴えるのではなく、指を鳴らすお決まりのポーズによってセルフコントロールを促すものである。この“Stop now and plan”が、信号機の赤・黄・青に象徴されていた。ビデオでは、SNAPのロールプレイの様子が記録されていた。2人の男の子の間で、意図的に葛藤の状況を作り出す。ストレス状態に陥った子どもは、そこで指をぱちんと鳴らし、“Stop now and plan”と声を出し、自分の要求を相手に言葉で説明するのである。このSNAPは、カナダだけでなく、さまざまな国にも輸出されており、オフィスにはその分布図が張られていた。

午後、女の子のプログラムについてローダリン氏（Rodelyn Wisco）から説明があった。女の子の暴力は、顕在化しにくいという特徴がある。男の子の場合は、怒りやストレスの爆発という形で暴力が健在化されることが多いが、女の子の場合、そういうネガティブな意識が隠されることが多い。これらのプログラムは施設の中だけで完結してしまうのではなく、学校や家庭との連携のもとに、フォローアップも行われる。

子どもの問題行動の中には、子どもが学校で排除されてしまうことが原因となっている場合もある。そのときには、スタッフが学校に向いて教師と話をすることもするという。私たちは「そんな時には教員からひどい扱いを受けることもあるのではないかと質問した。それに対してローダリンさんは「もちろんあります。でも、先生たちがなぜこの子どもたちを排除しようとしなければならなかったのか、その先生の状態を理解しようとしません。」とおっしゃっていた。子どもと学校や家庭、子どもを取り巻く環境すべてを受けとめ、ともに子どもの発達を保障していこうとする姿勢が示されていたようで、とても印象的な言葉だった。あふれ出てくる怒りや激しい情動を最初から押さえ込む形での自己抑制

プログラムについては、疑問が残るところもあったが、職員の子どもや子どもをめぐる環境に対する姿勢と、徹底されたスタッフ養成については大変驚かされた。

#### IV. 子どもの病院 (Hospital for Sick Children) —子どもの発達を援助する組織

今回のカナダ調査では、この子どもの発達研究所のほかに、子どもの発達を援助する施設として、子ども病院 (Hospital for Sick Children) も訪問した。ここは世界的にも有名な子どものための病院で、まるで遊園地のような楽しい雰囲気の病院だった。まさに病気の子どもを治療するための病院である。

しかし、私たちが訪問したのは、病気の子どものための病院にありながら、病気でない子どものためのプログラムを行っている。つまり、わかりやすく言い換えると、世界的にも有名な子ども病院に附属し、ADHDなどの障害や非行、貧困など、問題を抱える子どもたちと、大学や研究機関と行政などの各機関をつないでいく役割を果たしている施設なのである。お話をしてくださったこの病院のDr. Bruce Ferguson氏は、自らの活動を《Knowledge broker》とあらわしていた。最新の情報をジャーナルに載せるだけでなく、情報を広める、情報をどこに移すかという仕事なのである。スタッフは、心理学、社会学、教育学、ソーシャルワーカー、社会福祉など、医学分野から来る人は少ない。

この施設の重要な役割は、第一に研究である。子どもが健康でうまくいくように (successful) に過ごすことを育てるためのプログラムを進めている。家庭を超えて、学校生活の中でよりよく生活を送ることができることを目指す。そのために、メンタルヘルスシステムがどうなっているのか調査し、最新の知識と情報を学校の先生に伝える。大切なのは、研究を大学の中だけ行うのではなく、コミュニティーに機能させること。大学を通すと時間がかかるという。

第二に、資金調達である。常に外からの要望を調査し、どんな情報と知識をほしがっているのか考える。そのためにもministerと強いつながりを持つこと。そうすることで政府と行政、教師と行政の間をつなぐ。

そして具体的なプロジェクトについて、ロンダ氏より、ADHDの子どもたちのためのプログラムの話をうかがう。印象的だったのは、ADHDは問題行動ではなく、脳の問題であり、多くの教師はこの点を誤解していることが多いということだ。書かれている言葉を読むことはできるのに、それを総合することができないために、問題があると誤解してしま

う。わかりやすい言葉にすれば理解することができるのだ。また、ADHDかトラウマかという問題は、ADHDは、注意がばらばらで恐怖がない。一方、トラウマは、不安が定まらない。不安がどこから来るのか、不安が定まらないのがポイントである。

ピーター氏 (Peter Chaban) より、ビデオを使ってさらに詳しく説明してもらおう。知識をどうやって動かすか。伝統的な実践をどうやって変えるか。そして、11万人の教員養成をどうやっていくかということが課題だとおしゃっていた。

## V. ペプラー教授のアプローチ—子どもの発達研究の方法

最後に、このカナダ調査で私たち調査団の受け入れをしてくださり、調査のプランと一緒に考えてくださったヨーク大学のペプラー教授 (Debra Pepler) に彼女の研究の関心と研究方法についてインタビューした内容について報告したい。

ペプラー教授は、問題を抱えた子どもの研究と援助を行っている心理学者で、ヨーク大学、ラマルシュセンターに所属している。とくに、いじめなどの子どもの非社会的行動を、学校や彼らの親密な仲間の中に入り込むことによって観察、分析し、解決の手立てを見出そうとする研究をされている。

私たちは、前日のペプラー教授の講義に参加し、彼女のその研究方法と研究を支えている思想について非常に興味をもち、インタビューを行なった。前日の講義は、大学院生向けの講義で、Interventions for Bullying Problems : Scaffolding and Social Architecture (いじめ問題への介入—足場と社会的構築) というテーマだった。内容を要約すると、いじめが関係性の問題であると捉えた上で、実際の子どものいじめの様子をVTRで紹介しながら、研究の方法「naturalistic observation (自然観察法)」, いじめの構造分析と解決のための視点、概念として、「Scaffolding (足場)」 (子どもや教師、親を個別にサポートすること) と「Social Architecture (社会的構成/建築物)」 (子どもたちの社会的な文脈を組織して、望ましい仲間の相互作用を促進して、ネガティブな仲間の相互作用を抑えること) が紹介された。

講義で見た観察記録のビデオは、休み時間の運動場という子どもの自然な姿をとらえていた。いじめの被害者の子どもには、小さなマイクが取り付けられていて、そこで子どもたちがどんな言葉を交わしているのか克明にされていた。一見、大人が見ると、仲良くじゃれあって遊んでいるような様子だが、そこでかわされる言葉は、だんだんエスカレートして

いくのだった。具体的な子どもの世界を捉える方法と鋭い分析に参加した院生からもさかんに質問がおこり、私たちはその研究方法や概念に非常に興味をもち、別の日をもってインタビューを行なったのである。

インタビューは、11月29日（月）10：00、ヨーク大学のペプラー氏の研究室で、前日の講義の内容も含めて行なわれた。以下、主な質問とそれに対するペプラー氏の大まかな答えを記す。

まず、研究方法について、折出氏よりいくつか質問が出された。一つ目は、われわれと共通する部分ではないかと考えられる「Developmental systematic approach/study」をどう捉えたらいいのかという質問が出された。これに対して、ペプラー氏は、「子どものことを研究するには、developmentとsystemが必要である。子どもは、関係性の中で、そして発達によって変わってくる。システムティックでなおかつ発達的にもサポートするという意味で、深く広い研究方法でなければならない。」

二つ目は、「Scaffolding」「Architecture」という概念によって、全体を捉えようとしたのはいつ頃からかという質問が出された。これに対して「この概念を使っているのはここ1年くらいだが、まだ発展段階の概念。Scaffoldingは、ブルナー、ヴィゴツキーのdo scaffoldingから影響を受けている。do scaffolding、つまり、ZPDをプッシュすることは、教師が無意識にやっていることでもある。そして、Architectureは幅の方。好きな子どもたち同士でグループわけをさせるのではなく、先生が配慮しながらグループわけをすることもArchitectureになる。」

三つめに、「naturalistic observation」について。naturalistic observationとは、一般的にどのような観察法なのか、なぜこういう方法にいきついたのか、バックグラウンドは、といった質問が出された。これに対して、ペプラー氏は、「面接法と自然観察にはそれぞれ利点がある。どちらも知りたい対象に近づいて理解するための方法。自然観察法は、子どもの自然な世界で何が起きているのかをできるだけ近くで知るための方法。ピアジェや動物観察はとても参考になる。大人の方からの推測や理論は、実際の子どもの世界とは違っていることがある。自然観察によって本当に何が起きているのかを学ぶ。そこから面接での問いも生まれる。」

さらに、ペプラー氏がもっているフィロソフィーに関して、どういう思想に出逢って実践と研究をつないでいるのか、そのスタイルの基礎は何かという質問が出された。これに対して「1980年後半コロラド大学で、Science-practice modelを学んだ。今かかわっている

ホスピタルは研究の成果を広げる場である。心理学では実践につなげていかなければならないという使命がある。実践へ出て、教師がどう対応していけるかどう子どもを見て教えていくかというのは学生にも持ってほしい視点だ。」

次に、庄井氏より、「アセスメントとunderstanding（理解）の違いについてどう考えるか」という質問が出された。これに対して、「アセスメントを細かくすることが理解にはつながらない。アセスメントとは、スタティスティックなもの、動かないものをつかむためのもの。今この瞬間の子どもを捉えるものでしかない。それは、動かない絵のようなもの。一方、understanding（理解）とは、ダイナミックなもの、動いているものを捉えること。子どもが世界と交わるときを捉えること。そのダイナミックなものを捉える足場としてscaffoldingがある。アセスメントは大人と子どもが一对一で行うものだから、大人の前で、話したことが、子どもたちの世界に戻ったとき食い違うものになる。大人と子ども的一对一で行うアセスメントから、何も問題ないと思っていたことが、実は重大な問題があるということがある。だからnaturalistic observationが必要になる。」

さらに、続けて、「ではnaturalistic observationのゴールはunderstandingか」という質問が出された。これに対して、「naturalistic observation だけでなく、実際に子どもと話をし彼らが何を考えているのかをつかむ。そうすることでunderstandingへ。」

続けて、田中氏より、「私の知り合いで、動物生態をやっている動物学者がいるが、彼は、シートンを研究している。彼の話によると、シートンは、動物を捕まえて殺して観察するのではなく、自然に生きているものを自然の中で捉えることを重視したという。子ども理解においても同様に、実験室の条件統制されたところではなく。子どもと話してみないとわからないというとき、Narrativeとセットにしていると考えていいのか。」これに対して、「今、薬物中毒の子どもたちのプロジェクトを進めているが、その場合グループに焦点を当てている。ナラティブと自然観察をセットにすることは理想。ポルトガルにナラティブと自然観察をセットにしたいじめの研究がある。休憩時間の子どもをVTRに撮影し子どもに話を聞くというもの。子どもをいったん理解したと思ったら一皮むけて別の皮が現れる。その問題の深さは玉ねぎのようだ。」という答えだった。

インタビューを通じて、教員養成のカリキュラムとして子どもの観察、理解を支える有効な方法や概念を得ることができた。とくに乳幼児期の子どもの場合、その複雑で理解しがたい世界を分析する際に、naturalistic observationの方法は非常に有効であると考えられる。

ペプラー氏は、いつも投げかけられた質問や意見に対して、必ずまず相手の言葉を受け止めて“absolutely”とか“right”と応じていた。とくに“absolutely”は日常的によく使っている言葉だった。“absolutely”と言って必ず人を受け入れて、ちゃんと「でもね…」と説明してくれる。多様な文化に対して寛容なカナダらしさを表しているようでもあった。

## おわりに—カナダ調査の課題と展望

カナダ調査全体で出会ったことをまとめると以下の3つに整理することができるだろう。

一つは、子ども理解の思想との出会いだ。私たちがカナダに到着して、驚かされたのはアセスメントとプロジェクトの嵐だった。非常にシステムティックに問題を整理し、対応するためのシステムが作られているシステムに感心するのだが、その一方で、問題を査定し、この問題にはこのプログラムをと、問題を細かく分解し子どもをばらばらにしていくような印象をもった。こうした動きの要因として同じ北米に位置するアメリカの研究の影響があると考えられる。とくに教育制度的にはその影響は大きいと考えられる。

しかし、その一方で、CISでのエリザベス校長の教員養成では、「いかに教えることができるか (teachable) , つまりいかに結果としての学力を身につけさせるかよりも、いかに子どもを理解できるか (understanding) です」と言う言葉や、ペプラー教授の naturalistic observation (子どもの自然な世界で何が起きているのかをできるだけ近くで知るための方法) といじめの分析と解決のための方法には、深い子ども理解の思想が感じられた。

その背景には、国民性や風土も関係しているだろう。つまり、カナダがもともと先住民以外は移住者によって構成されてきた国であり、その中でもトロントは国際都市であることを標榜している都市でもある。どんな人も互いの人権を尊重し、互いに助け合い、そのことが結果的に社会を豊かにするという考え方がベースにある。こういった深い人間理解と援助の思想を基盤としてもちつつも、アメリカ主導の認知心理学の研究成果、新しいプログラムや分析枠組みが輸入されつつあり、混在していると言えるだろう。

二つ目は、デューイ以来のさまざまな実験施設、研究施設との出会いである。臨床教育学の看板をもって何かをつかみたいと躍起になって問いを投げかける私たちに応えてくれたのは、旧来の大学の中の教育学部ではなく、子どもの発達研究所をはじめ、子ども病院

やペプラー教授が所属するラマルシュセンターなどの子どもの発達を支援し、支えるための研究や情報提供を行なう施設だった。その施設で実際に生き生きと動いているものにふれることができ、私たち自身も元気になるようだった。

三つ目は、観察・記録などの研究方法、調査方法との出会いである。ペプラーさんの自然観察法をはじめ、OISEでの教員養成のプログラム、その他の施設でのスタッフの教育など随所で、子どもを徹底的に観察し、深く理解するための方法とプログラムに触れることができた。今回、実際にOISEの実習での観察記録や、子どもの発達研究所での記録を見ることができなかったが、記録のあり方としては、学生と養成校教員だけにとどまらない子どもの保護者への開示も含めた記録や、ポートフォリオとしての記録、観察のトレーニングなど示唆されることは多い。今後、保育士養成や幼児期の教育に携わる教員の養成段階でのカリキュラムを考える上でもさらに明らかにしていきたい。

本報告は、「臨床教育学の展開と教師教育の改革」（基盤研究B1530160）の成果である。

---

<sup>3</sup> 森博俊「フィンランドのSpecial Educationについて」『臨床教育学と教師教育研究資料集Ⅰ』20～22頁参照。

高松大学紀要  
第45号

平成18年3月25日 印刷  
平成18年3月28日 発行

編集発行 高松大学  
高松短期大学  
〒761-0194 高松市春日町960番地  
TEL (087) 841-3255  
FAX (087) 841-3064

印刷 株式会社 美巧社  
高松市多賀町1-8-10  
TEL (087) 833-5811